

# グリーンサイエンス21便り (15)



## 漱石と伝染病

中島 多津子(なかじま たづこ) 文京漱石会代表

漱石は三才の時天然痘、疱瘡(ほうそう)にかかり、身体中に発疹が出来て四転八倒の苦しみにあった。明治3年5月種痘令が布告される。夏の終り頃に漱石は接種を受けた。それが本疱瘡になつてしまった。『道草』に「種痘が元で、本疱瘡を誘いだしたのだとかいふ話であった。彼は暗い櫛子(れんじ)(窓や欄間などに一定間隔でとりつけた格子)のうちで転げ廻つた。惣身(そうしん)の肉を所嫌(ところきら)はず掻き撈(むし)つて泣き叫んだ。」とある。

顔に痘痕(あばた)が残つた。大きなポスターの肖像を丁寧に見るとそれと分かる事がある。漱石は生涯ちよつとしたコンプレックスを持つていたようだ。『我輩は猫である』に苦紗弥先生が鏡で自身の顔の痘痕を観察する場面がある。ロンドンで「外国人の痘痕の人にあった。」「痘痕の顔の人に何人あった」の他人に聞いた記述もある。疱瘡を患う前は外国人も振り返る程の玉の肌だったらしい。『道草』の発想の根本は幼児体験といわれているから疱瘡に罹ったことも大切な要素なのかも知れない。ウイルスを病原体とする流行性感冒のインフルエンザは明治時代には「死を招くこともしばしばあった。」と作品にも描かれている。『琴のそら音』の余こと靖男は

婚約者の露子が死ぬのではないかという不安に囚われ一晩あかす。雨上がりの翌朝、小日向の自宅から四谷まで下駄で駆けつけ無事を知る。『雨』の安井が転地療養する原因となったのもこの病だ。『三四郎』が美弥子に冷たくされたと感じインフルエンザに罹り美弥子から果物の籠を持参したよし子に手厚く看護を受ける。

漱石の病歴を辿ってみたい。明治20年、21才でトラホームも患う。明治27年肺結核と診断される。自然に直つたようだ。その頃被害妄想や関係妄想にもなる。松山行きを決心した頃である。追跡症、神経衰弱と狂気と『文学論』序で自ら述べている。『彼岸過ぎまで』『行人』の頃は内因性鬱病があり分裂性という説もある。『猫』の「胃弱は僕の生涯を通じて病」である。『明暗』の痔もある。糖尿病もあった。作品では『こころ』の腎臓病がある。『硝子戸の

中』で「私の身体は乱世です」という一語は晩年の創作活動が、どのような危機意識の上で作られたものであるかが知られる。病気は人を優しくすると云う。芸術は狂気とも云われる。創作に大きく影響している事は確実だ。一年余り続くコロナ禍だ。早く終息を願うばかりだ。ワクチン接種日が決まったが安心は出来ない。

